**雪のための道具、道具としての雪**

十日町の人々は、何千年もの間、豪雪と共存しながら、雪を扱うさまざまな専門的な道具を生み出してきた。一日に降る雪の量は50センチを超え、積雪の高さは年平均2メートルにもなる。11月下旬の初雪から4月の雪解けまで、十日町は1年の半分を真っ白な世界で過ごすことになる。

雪と付き合うには、雪を移動させたり、取り除いたり、圧縮したりする道具が必要だ。また、自身や物資を移動させる手段も必要だ。ソリやスコップなど、用途がわかりやすい道具は多いが、用途がわかりにくい道具もある。例えば、「雪切りノコギリ」。屋根の雪下ろしに欠かせない。「コシキ」と呼ばれる道具は、表面の緩い雪を削り取るのに使われるが、底の湿った雪は圧縮されて氷のように硬くなる。それを大きな塊にして切り落とすのが「雪切りノコギリ」である。

他の道具はもっと一般的かもしれないが、意外な特徴を備えている。そのひとつが「スカリ」である。柔軟性のある特大のスノーシューで、竹の骨組みの先端から履く人の手元まで藁のロープが通っている。通常、スカリは長すぎて歩行が困難だが、ロープで骨組みの前部を引き上げたり戻したりすることで、通常のスノーシューのように使用することができる。一方でロープを離すと、雪を踏み固める面積が増える。こうすることで、切れ目のない深い雪を渡ると同時に、スノーシューなしでも通れる道を作ることができる。今日では、スノーブロワーやその他の機械化された、あるいは大量生産された道具に取って代わられたスカリだが、昔は地域の共同通路を作るために使われていた。年配の住民は、早朝から子供たちの通学路を確保するために出かけた。

食べ物の準備や保存に関係する道具もある。たとえば、野菜を火にかけて乾燥させるために使われた格子状の木製の棚（火棚）や、夏の気温上昇で雪が溶けるのを防ぐために雪の山に敷く藁の編物などだ。保護された雪は、雪用のこぎりでブロック状に切り出され、暑い季節の冷蔵用に使われた。

長い冬の間、農業が中断され、屋内に閉じこもった人々は、生活を支える道具を作り、維持するために働いた。稲わら、竹、カラムシなどの天然素材を使い、衣服から魚篭まで、あらゆるものを作った。興味深いことに、これらのアイテムの多くは雪そのものによって強化された。「雪ざらし」と呼ばれる工程で、雪の上に材料を並べ、太陽光の紫外線と雪解け水が放出する水素イオンが繊維を漂白、柔軟させたのだ。

これらの道具の数々は、雪国の生活を物語っている。また、十日町の遺産である人々の知恵、共同体の団結力、自然界とのつながりを示している。これらの道具はまとめて、重要有形民俗文化財に指定されている。